
セントプレース

小鳥遊 貢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイントプレース

【Nコード】

N0333A

【作者名】

小鳥遊 貢

【あらすじ】

近未来ファンタジーっぽい仕事請け負い屋“セイントプレース”。その社長、小鳥遊貢が送る超未来ファンタジー。

プロローグ 〱作者的貢による自己紹介〱

えー、僕は小鳥遊貢（たかなしみつぐと読みます）。

一応作者と同じ名前ですが主人公です覚えてください（といいいます）。

えー、本編ではこんなノリ出はありません。

安心してお読みください。

まあ安心しようがないけれど（汗）。

では簡単な内容をいいます。

初期設定ですので本編では変わる場合があります。予め御了承ください。あー、舞台は宇宙進出を始めたばかりの地球。

宇宙戦争の要因にもなったクロスディステイニー事件を始め、その後の第一次宇宙大戦、ウランバートルウォーなどを描いていくつもりです。

まあ詳しいことは本編で。ではスタートポイント、フィジーのビレチブ島ナディへ…

序章 〱本編的貢による自己紹介〱

僕は小鳥遊貢。

ここはオーストラリア北東ビチレブ島フィジーという国のナデイ。僕はここで育った。

でも生まれたのはここらへんではないそうだ。

ちなみにここは白人と黒人が同じくらい住んでいるけど僕みたいな黄色人種は僕以外では余りいない。

まあ当然といえば当然だけど。

ああ。

言うの忘れてたけど僕は17歳。

育ててくれたオバサンは2年前に亡くなって今はオバサンが遺してくれた一軒家で一人暮らし。

まあこれくらいで身の上話はいいでしよう。

さあこの辺で歴史を振り返ってみようかな。

今はC・A・(COSMOS AGE)の略。

宙暦という今の年号だよ。

(0054。

なぜ年号が変わったかというとA・D・3641(西暦のこと)日本という国がM・C・S(MOON COSMOS STATION)の略。

月の宇宙ステーションのこと)を作ったことから始まったんだ。

そしてその後西暦3070年に日本とアメリカ、イギリスが合同で超運算機構、M A R I A という人工頭脳を開発し、それを脳に移植し、グラディエーターと呼ばれる強化人間を生み出したんだ。

今じゃ珍しくもないんだけど昔は道具みたいな扱いをされてたんだって。オバサン曰く

「人は自分が知らないものを認めようとしない愚かな生きもの。」
なんだって。まあ少し同感。

あ。ちなみに言うのまた忘れたけど僕もMARRIAを持つてるんだ。普通は移植手術をするんだけど僕のは生れ付きなんだ。オバサン曰く「あんたはやっぱり闇に生きる者。」

だって。なんでだろう？まあいいや。で、MARRIAの機構とそれをサポートする機械を少し紹介するね。

まず、MARRIAとはさつきも言ったけどコンピューターの数億倍の演算速度をもつ人工頭脳。

普通は前頭葉に移植されるんだ。

そして感覚や運動を司る色々な神経を操り、倍加や色々なものへの干渉ができるようになるんだ。

例えば、外界認証能力5倍と設定すれば色々な感覚器からの情報伝達速度及び思考速度が通常の（普通の人間の）5倍にのびる。

具体的に言うと1分が60×5＝300秒に感じられるんだ。

でも体は普通にしか動かないから、通常は運動能力も5倍するんだ。これで5倍に引きのばされた時間のなかでいつもの感覚で動けるんだ。もちろんやりすぎは危ないけど。

次に超合金、S・I（SPECIALITY IRON）の略。

特別な鉄っていうこと。

（）に超微細電子回路を刻み込み、それで容量を増やし演算がさらに大規模に干渉できるようにする、D・W（DANGER WEAPON）の略。直訳すると危険な武器）を紹介するね。これは主に大剣の形に作る。

そのほうが回路がたくさん刻めるからね。

それとMARRIAをつなぐものは、手なんだ。

手にも体のあちらこちらから情報が行き来してるから、剣の柄に干渉すればもつつながるってわけ。

ちなみにこれで戦うグラディエーターのことを僕らは騎士^{ナイト}って呼んでる。

騎士はその大容量の剣をふるい直接ダメージを与えるけどそれだと隙も大きいし、何より相手がグラディエーターだと不利なんだ（普

通グラディエーターは遠隔攻撃が主流だから。そこで編み出されたのが剣とM A R I Aで生まれる大容量で自分のまわりの空気を丸ごと干渉する“自我の発生”と呼ばれる技術なんだ。

まあそれを発動するにはかなり熟練した技術が必要だし、M A R I Aの他のプログラムをすべてシャットダウンしなきゃいけないんだ。そんで他のグラディエーターについては出てくるたびにこんなふうで紹介するから。

おっと。あとひとつ(だと思っけど)言い忘れてた。昨日アメリカ西海岸でグラディエーターによる大規模戦闘があったらしいよ。

朝からニュースはそれで持ちきりだ。

さあて、仕事を始めますか。

「～セイントプレースへようこそ～」

第1章 GET LOST!〜消え失せる!〜

ああー。ではそろそろ真面目に本編始めますか。

「ただいま。」

はーっ。虚しいなあ。もう一人なのにいつもオバサンの声がするのを期待している自分がいる。

「おつかえりー!」

予想に反して明るい声が聞こえてきた。

玄関奥の扉が開き、姉マリアが出てきた。

もちろん血はつながってない。

でも姉も肌は僕と同じ色だった。

肌色に鮮明なブロンドの髪。

顔立ちもシャープでどこへ行っても人目を引くマリア姉は僕にとって自慢の姉だ。

「あれ?何でマリア姉がここにいるの?」

マリア姉はグラディエーター養成学校の一年で成績優秀。だれもが一目置く存在らしい。

でも姉が一度話してくれたことがあるが、姉の目標は僕でほかはそれの準備にすぎないそうだ。

僕より強い人だっっていると思うけど。

「えっとね。今度の授業参観みっちゃんにきてほしいの。」

「え?何で僕?僕のが年だっただよ?」

「あのね。その授業が実戦訓練で、生徒が二人ずつ戦うんだけどそうすると人数的に一人余るの。」
僕はピンと来た。

「それで僕が出るん？」

「そうなんだけど。ダメ？」

「マリア姉はすこし上目遣いでこっちをみる。

彼女のこの誘惑に勝てる人はいないだろう。

「わかった。行くよ。」

「やったー！」

こいつときのマリア姉はとても可愛い。僕の口にも微笑が漏れた。

「さてと。仕事来てた？」

仕事とは、僕がやってる仕事請け負い屋の依頼のことだ。

主に裏の依頼で、グラディエーターの僕でも結構大変だ。

「来てたよ一通。」

それを聞くと急いで二階にある自分の部屋に行った。

といっても階段を上ると扉が一つありそれを開けると僕の部屋だ。

前まではマリア姉と一緒に使っていたけど今は養成学校の宿舎に泊

まっているから全部僕が使っている。

机に向かいパソコンを立ち上げると確かにメールが一通来ていた。

件名は“極秘依頼”。

差出人は不明。

まあ大体こういう依頼では普通だ。

依頼内容はアメリカの難攻不落といわれるワシントンタワーからの
情報奪還。

ワシントンタワーは世界各地に建てられた軍事シティのなかで最も
広く、最も新しい。

ワシントンに住む人とはそのタワーに住む人だし、むかしのワシン
トンD・Cも今ではタワーのことだ。

はじめての種の依頼だ。

情報奪還。どんな情報なのだろう。依頼請けますというメールを送

り、下に降りた。下ではマリア姉が夕飯を作っているところだった。「その授業参観って明日だったよね？」

「うん。そうだよ。」

そして夕飯を食べ、うえに登り、依頼詳細の返信をみたあと。風呂に入り早めに寝た。

次の日は五時に起きて、マリアのプログラムチェックと銃の作動点検をしてマリア姉の朝食ができるのを待った。さっきの銃はグラデイエーター用の回路が入っている。

僕が使うのは二つでどちらも百発圧縮マガジンで、大口径の銃ガイア（僕がこう呼んでいるだけだ）と44マグナム仕様の連射銃フレイマー（これも僕が勝手に付けた。）だ。

6時ごろガサガサと下で音がしはじめた。

マリア姉が起きたのだらう。しばらく待つと30分ごろ、

「ご飯できたよー」

と声が聞こえた。

下に降りるとダイニングに置かれた結構大きなテーブルの4分の1を占めるであろう範囲に、所狭しと料理が並んでいる。

「お早ようマリア姉。いつも言ってるけどさ、誰がこんなに食べるんだよ。」

「あら。いつもぺろっと平らげるのはどこの誰かしら？」

「う。」僕は言葉に困った。

いくら料理が多くてもマリア姉の料理は美味すぎてすぐ食っちゃっってしまうのだ。

「まあ。いいや。じゃあいただきます。」

お腹が苦しい。

やっぱり平らげてしまった。いくら何でもあの量は食い過ぎた。

今僕らは、ホバーリニアという昔のモノレールに似ている乗り物で、養成学校のある首都スパに向かっている。

のつてから30分がたったであろう頃ホバーリニアが激しくゆれた。

「なんだ？」

車内の様々なところから悲鳴があがる。

僕とマリア姉は互いに顔を見合わせ互いの意志を確認した。

マリア姉からこの列車を救う、という思いが伝わってきた。僕らは一緒に立ち上がり悲鳴が大きいほうの車両に歩いていった。

二つほど車両をあるいたくと、人が折り重なるように全員倒れていた。

しかし傷は浅く、気絶をさせられているだけのようだった。

しかしここまで完全に狙える生き物を僕は一つしか知らない。

直感的にグラディエーターの仕業だと思った。

しかも複数。

そんなに多くはないが、厄介そうだ。

そのまま三つ四つと車両を過ぎたがどこも変わらず同じような状況だった。

五つ目の車両に入ったとき僕らは犯人の後ろ姿を一瞬見た。

マリア姉の身が強ばるのがわかった。

さらに次の車両を急ぎ足で通り過ぎると、車掌室の前で犯人は待っていた。

口元にうつすら笑みを浮かべたその顔は20歳過ぎと見える。

「おまえもグラディエーターだな？」

奴は聞いてきた。

「ああそうだ。」言うと同時に、戦闘プログラム始動。知覚、運動能力を20倍に設定。ガイア、フレイマーを右腿と腰の後ろに着け

たホルスターから外し右手にガイア、左手にフレイマーを握る。
もしものことを考え、騎士用の大剣エクスキャリバーを圧縮解除第
一段階に下げる。

相手も同じように何かのプログラムを始動させたようだ。
奴の右手にはすこし短い細身の剣が握られていた。

日本の、刀というやつらしい。

まず行動を起こしたのは奴の方だった。

刀を上段に構え、振り下ろしながら走ってくる。

なんて隙のある行動なんだろうと思いつながら、ガイアの銃身で軌道
をずらし、フレイマーで奴の右脇腹に2発お見舞いしてやった。

「うぎゃっ。」

何とも醜い声をだしながら、こっちを睨み付けてくる。

そのまま奴は遠距離から刀を離し地面に手を置いた。

なんだ？と疑問を思いつつも、ガイアを奴の右肩口に打つ。

奴の右肩から血肉が飛び散るのも構わず、奴はそのままの格好だ。

すると急に足が動かなくなった。

足元を見ると太いワイヤーが数本足に巻き付いている。

それがすごい力で締めあげてくるから、痛覚をシャットダウンしな
ければ、悲鳴を上げてただろう。

奴はてつきり近接戦闘の騎士だと思っていた。

だが本当は、遠隔も遠隔の紐使い（マタドール）って奴らだ。

奴らは金属製の物を自由に操る。

。だったのだ。

くそっ。今まで気付かなかった自分に悪態を尽きつつ、エクスキャ
リバーを圧縮解除し、フレイマーをホルスターに戻し、ガイアを左
手に持ちかえ、エクスキャリバーを右手に持つ（実は僕も普通は銃
で戦うが、本当は騎士やクリアなどの特殊系グラディエーターなの
だ。）。いきなり現れたエクスキャリバーを見て奴は驚いたようだ。
だが自分のほうが有利だと思っっているようだ。この身のほど知らず
めが！

エクスカリバーで足のワイヤーを一閃した。

きれいにワイヤーは切断され、元の形に戻っていき、最後は床に溶けるような形で消えた。

そして最高速でダッシュしすれ違いざまに奴の腹を切り付けたがワイヤーが現れ剣の軌道を逸らし、擦りもしなかった。

仕方がない。

MARIAから全てのプログラムを終了させ、メイドバイMITSUGUのプログラム騎士を作動させる。

そして振り向いて奴の脳天めがけて思い切りエクスカリバーを振り下ろす。

もちろん奴のワイヤーが現れて邪魔をしてきたが、僕のプログラムでエクスカリバーに触れた瞬間、回路によって空間を書き替え、奴のワイヤーを存在ごと消した。

そして邪魔をするものがなくなったエクスカリバーは奴の脳天に落ちる。

だが脳天ギリギリで止めた。

奴は気を失ったようだ。

だらしないう奴だ。

そして紐使いプログラムを作動させ、奴をワイヤーで縛った。

僕らはそのまま進行するホバーリニアに揺られながら、首都へ急いだ。

章末おまけ。

マリア姉

「ねえ。何か私忘れられてない？って言うかみっちゃん凄すぎて私が出る幕ないじゃん！」

貢

「いやそんなこと言われてもこれも作者の陰謀だから、僕はどうし

ようもないよ。」

マリア姉

「あっそ。では気分を切り替えて、私が大活躍する。第2章へ！」

やっと着いた。

僕は心から喜んでその事実を噛み締めた。

あのグラディエーターを倒したあと、降りた首都駅でかなりの数のマスコミに囲まれもみくちゃにされた。

そんなに強いんだったらマスコミなんて当たり前じゃないの？なんて思っている読者諸君。

それは確かに騒がれたことも何回かはある。

だが僕はもともと仕事上はシーモンキーという名を使っていて、鬼の鉄仮面まで着けているから新聞には

「天才！少年グラディエーター」

なんて見出しで載ってしまうのだ。

今は駅から歩いて学校まで向かっている。マリア姉はこの重大さに気付かない様でむしろテレビや新聞に出れてうれしそうだ。

え？なぜ僕はうれしくないかって？そりゃ、戦闘場面と顔や体格でわかる人には僕だとわかってしまうのだ。

要するにそれは直接死に関わることなのだ僕のような仕事をしている人にとっては。

そんなこんな考えているうちに学校に着いた。前に二回くらい来たことがあるが、なぜこんな大きな施設を作るのか分からないほど大きい。

しかもこんな建物を作る資金をどこから調達してくるのか分からないほど豪華だ。

それこそ最新型パソコンに始まって、新しい機械は全てここにあると言っても過言ではない。

ここには大きく分けて3ブロックあり、勉学ブロック（何とも格好悪い名だと思う）。

（）、住宅ブロック（ここに宿舎がある）。

）、レクリエーションブロック（運動場や体育館、プールなどがある）。

何故かこれだけマシな名前だ。

）と分かっている。

その内の宿舍ブロックに向かい、マリア姉が勉強道具と、動きやすく格好もまあまあよい運動用制服（制服はひどいデザインだから大体の奴らはこれを着ている）。

あくまで僕の見解だが。

）に着替えると今度は校舎のある勉強ブロックに向かった。

校舎に入るとかなりの生徒がごった返していた。

「お早よう。マリア。」

とマリア姉に後ろから声がかかった。

振り向くと何度か家にきたこともある姉の親友、ミナ・ラット・グリーがいた。

彼女はマリア姉と一緒に、この学校の有名看板娘だ。

「お早ようミナ。」

マリア姉が挨拶した。

「あり？貢ちゃんでないの！何でこんなとこに来てんの？」

言いながら、僕の背後から覆いかぶさり後ろから抱きつかれる形になった。

この人はいつもこうだ。

大体これでも17歳なんだけどな。

結構恥ずかしいし何といても背中に触れる二つの膨らみに意識がいつてしまう。

「今日の授業参観の実践訓練一人足んなかったじゃん。だからみっちゃんにやってもらおうと思って。」

「え？貢ちゃんってグラディエーターなの？」

僕の後ろで叫ぶのはよしてほしいと思った。

「そうだよ。みっちゃんは国グラから認められてるデスマリア級のグラディエーターよ。」
マリア姉が得意満面に言う。

ちなみにデスマリアというのは、国連が定めた戦闘能力評価にのっとり、国グラ（国際グラディエーター協会）がランク分けした中の最高位グラディエーターだ。

まあこんなものはさして自慢にはならない。

なぜなら僕みたいな職の奴らはこれ以上じゃないとやっていけないのだ。

ランクはリブ ライフ ゴゾル ダッド マロワ ニギナ イフリ

デスの8段階だ。

「デ、デス？凄過ぎ。」

ミナは啞然としながら離れていった。僕らはマリア姉のクラスに向かった。

クラスにはすでに大勢の生徒がいて、各々思い思いのことをしていた。

何人かはやっぱり僕について聞いてきた。

そのたびマリア姉はミナに話したような自慢話をしていた。

そのうち担任のグレア・グレゴリーが入ってきた。

かなり若い男の奴でかっこ良いが結構消極的な人だ。

前にここに来たときもこの人が担任だったからお互いのことは大体知ってる。

「あれ？」

マリア姉の隣に座っている僕を（たまたま隣が空いていたから座った。

）みて言った。

だからまたマリア姉がその旨について語った。

はたまたデスマリアという単語でどよめきが起こった。

まあ確かに最年少で獲得したのは確かだけどそこまで驚く必要はないと思う。そして実戦授業がある3時間目まで、おもしろくもない

授業を聞いていた。

こんなのは5年前ランク分け試験を受けた時以来だ。

そして3時間目。

生徒全員が運動用制服を着ていて女子にいたってはチャック式なのをいいことに胸の谷間が見えるぎりぎりのところまで下げている。

こんな不真面目な態度で本当にグラディエーターになれると思っ
ているのだろうか？などとも思いながらトーナメント表をみた。

男女混合になっている。

そんな馬鹿な。

男と女じゃ力量からいって違う。

もちろん相手がミナ姉やマリア姉なら別だが。

えーっと僕の対戦相手は？自分の名前を探すとマリア弟と書いてある。

何という適当な名前！？と思った。

そして対戦相手は……マルチ・アブと書いてある。

マリア姉に誰かと聞くとかなりの対戦表をみて余裕ぶっこいているオボツチャマ風な男だと教えてくれた。

しかもかなりのやり手らしい。

マリア姉も負けたことがあるそうだ。

もうこの時点でむかつ腹が立ったし、マリア姉の復讐という大儀名文でボコボコにしてやろうと思った。

対戦は第四戦でルールはゴム弾使用の銃とその他殺生能力のない武器、殺傷能力のない攻撃を認める模擬戦ルールだった。

第四戦のホイッスルが鳴るまでどんな方法でいたぶってやろうかと思っただがやはりやめにして簡単に終わらせる方法にすることにした。

模擬戦が始まった。

場所は体育館で、高さの違う平均台のようなものが並んでいる。床や壁は金属だ。

マルチ何とか（以後、奴。

）が手にもった銃を連射してきた。

確かに狙いはいい。

だが一応M A R I Aをもった者ならもつとましの戦い方をしてほしい。

知覚、身体能力を5倍に設定。

そのまま最小限の動きで弾を躲しつつ、奴に接近する。

同時にエクスキャリバーの圧縮解除をした。

その切っ先を奴の首に突き付けて終わらせてやろうと思ったのが、剣を振る前に気付かれてしまった。

奴は飛び上がり一番高い平均台のうえに乗りまた連射してくる。

今の跳躍速度から推測すると50倍といったところか。

そんな速度は単に反応が鈍る容量まで使い、逆効果だということに気付かないのだろうか。馬鹿だなど考えつつ、エクスキャリバーを再び圧縮する。ガイアとフレイマーを引き抜き、奴の弾を避けながら牽制弾を撃つ。

奴は牽制と本命の区別もつかないらしい。

牽制で動き過ぎて本命に何度もぶつかりフラフラだ。

仕方がない。

終わらせてやるか。

“紐使いプログラム作動”、視界がマ リックスの様に数字の羅列に替わる。

視界のなかの、奴の後ろの金属質を含む壁に変化命令を出す。といつか空間を書き換える。

書き換えた場所の金属部分がグニヤリと細長いワイヤーに変わる。

まわりの金属もつかって体積を増やしながら奴の後ろから突っ込ませる。

奴はまだ僕の牽制弾に惑わされ、気付かないようだ。

ここまで馬鹿だと慈悲の一つでもかけてやりたくなる。

数人の生徒がワイヤーに気付いたようだ。

大声で叫んで奴に伝えようとしている。

だが遅い！先端を丸くしたワイヤーが奴の気付かないうちに勢いを出せるだけ殺してぶつかった。

もちろん奴がいるのは高い平均台のうえだ。

だからワイヤーの衝突で完全にバランスを崩した奴はかなり不恰好に落ちはじめた。だれもが息を呑むのがわかった。もちろんそのまま殺すようなことはしない。

操作できるギリギリの範囲をできうる限りワイヤーに換え、奴を四方八方からからめた。

奴は頭を上にした状態で頭、腕、足を除いた部分にワイヤーがからみ、蜘蛛の巣にかかった可哀想な蝶のようだった。

「試合終了ですよね？」

試合終了のホイッスルを吹かない審判兼先生に尋ねるとやっと笛が吹かれ、僕は奴を降ろしてやった。

僕はそのまま奴を無視して口をあんぐり開けて惚けたまま固まっているマリア姉とミナ姉の方に歩いていった。

「どうだった？」

聞いてみると、

「あのワイヤー何？」

と先に啞然が解けたミナ姉が聞いてきた。質問したのは僕何だけどな！。

「あれが紐使いがやるマニピュレートだよ。」

「ああ。あれがそうなんだ！」

復活したマリア姉が応答した。

「まあこんなぐらいしか実力出さなくていいんなら僕の優勝間違いないね。」

ちよつと生意気に言うと、

「あんな反則系能力に勝てるはずがないやん！」

微妙な突っ込み（？）をミナ姉が入れてきた。

「あんなの本気の1無量大数分の1も出してないし。」

と言つと、

「ああー。勝てっこない。」

と二人に声を揃えて言われた。

「フー。」

ため息をつきつつ、安堵感が込み上げてきた。

誰でも緊張するものだ。と思った（自分で言うのも難だけど親父くせえ！）。

そんな感じで楽勝で優勝してしまった。

なんかすごい疲れる一日だったなあ。

家へ帰るとき僕は独りだった。

何故かというとマリア姉は寮に戻ったからだ。

まあ明日は例の仕事だし頑張るべ！

独り言を言いながら帰る惨めな貢であった。

章末おまけ

マリア姉

「やっぱり私出番なかったじゃん！」

貢

「だからそれも作者の陰謀だって！」

マリア姉

「人のせいにしない！みっちゃんが目立ちすぎるのよー！」

貢

「うわー。ひどいよー！」

マリア姉

「では第3章 情報奪還！で会いましょう。それではご機嫌よう。」

貢

「チツ。最後まで自分でしっかり締めやがって。」

第三章 BELL IS RINGING

次の日、また5時前に起き、銃の整備をした。

そして簡単な朝食を食べ、その後以来詳細をもう一度見た。

依頼内容はワシントンタワーからの情報奪還。

情報はタワー中心部、コアブロックにあるマザーと呼ばれるコンピュータに、無題で入っていて、かなりの大容量だから分かるらしい。

だがそれにかけられているプロテクトは、数百ありこじ開けるのは難しい。

報償は、一億。

まあかなり高額なだけあってかなり大変そうだ。

その後、僕は6時ごろ、準備を整えて出発した。

その頃ワシントンタワー2階、居住エリア。

(ここからは別の時間軸で進行します。)

「ふぁーあ。」

とても大きな欠伸とともに、私は起きた。

私の名前は如月 アリス(きさらぎ アリスよ！ちゃんと覚えて

ね！) 歳は15。

肌は白で髪は金。

私は綺麗ってよく誉められるわ！私はMARRIAを移植してないけど、使えるわ！何故かしら？このことは誰も教えてくれないの！腹が立つわ！もう！私は今ワシントンタワー二階の居住エリアにいます！ただ、何だか今日は騒がしくて、私達タワーガードグラディエーターは町の巡回をしなくちゃいけないの。

ホント最悪。

それから3時間くらいたつたと思うわ(とりあえず私のMARRIAはそうだった)。

いきなり緊急戦闘警報が(私のMARRIAに)きたわ。

場所は一階の開放区。

まああそこではときどき騒動が起こるけど、戦闘警報が鳴るのは初めて。

だから急いで下へ降りてみると、私は驚いてことばも出なくなってしまうていたわ。

だってそこに広がっていた光景は、……………。

だってそこには警備隊の人達が、少なくとも100人は倒れていて（全員が気絶みだっただけ）。

）、全員がある一点を避けるように、円を描いていたからよ。その一点には……………、私に背を向けて男が立っていたわ。

鬼のような銀の鉄仮面をして全身黒の革服に身を包んでいて、右手にはまだ硝煙が立ち上る大口径の銃を握っていたわ。

きつとあの中身はゴム弾なのでしょうね。

私は……………。

私はこんなときなのに、彼が格好良いと思ったわ。

一目惚れとはこういうものなんだと理解したわ。

彼はクルツと私の方を向きニコツと笑ったわ（感じがしたただけだけ）。

だって仮面のせいで顔が見えないのですもの！）。

そして私に背を向けて行ってしまったの。

その速さは…MARIAでも見えなかった。

その後また別の機動隊が来る気配がしたから、私は彼を追ったわ。だってこの要塞で狙えるものといったら一つくらいしかないもの。

それは浮揚艦“ガルガンチュア”の設計図。

今製作中の艦で、日本の“ドラゴン”とも張り合えるってきいたわ。それがあるのは中枢気密ブロック最上級保護区。

あそこはゴム弾なんかで突破できるようなところじゃない。

急いで特別兵士用エレベーターに乗って、中枢に向かう。

かぁーっ。

疲れる！なんだよもう！第1警備破っただけじゃん！なんだってあ

んな沢山機動隊くんだよ！ム力つく！今僕は最上級保護区に向かうため、上級保護区、第1警備を破ったところだ。

第8ブロックまであるはずなんだけど、これじゃ日が暮れちゃう。

MARIAの第1制限解除しようかなあ？疲れたしな。

（第1制限っていうのは、僕が自分で禁止している能力で最高身体能力プログラムだ。）まあいいや。めんどくさいし。

「第1制限解除」

MARIAに向けてしゃべる。

力が放たれ、体中に“疾風”の力がみなぎる。

時速にして1000km以上。

音速の壁を破り、体に重圧がかかるが、もう慣れたことだ。

伊達に鍛えてるわけじゃない。

全力疾走から天井付近まで一気に跳躍する。

柵の一番上に空いている1メートルばかりの隙間を通る。

それと同じ要領で全ての柵を越える。

目の前にはエレベーターだけがある。

円柱で、天井を貫くその巨大なエレベーターは、何かとてつもない威圧感を感じさせる。

エレベーターに乗り、コントロールパネルにMARI Aのコードをつなぐ。

意識でプロテクトを破る。

さすがに負担が大きい。

300のプロテクトを、最短記録1分で破り、エレベーターを最上

級保護区に向けて発進させる。

「さあ、ここからが本番だ。」

独りで咳く少しの振動とともにエレベーターがあがりはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0333a/>

セントプレス

2010年10月10日04時24分発行